

行けたら行く

ある春の朝、こんな会話を耳にした。

A 「明日、〇〇〇があるのだけど、来ない?」

B 「うん、行けたら行くね。」

ふと思った。「行けたら行く」って、どついつこと? 何か変だ……

だって、「行けなかつたら、当然行かない」わけだ。「行けたら行く」というのは、当然と言えば当然じゃない。

しかし、よく考えてみると、この表現にはちゃんと深い意味がある。「行けたら」というのは仮定の表現。仮定として、「行けない」場合が想定されている。つまり、「行く」意志はあるけれども、それはあくまで「行ける」場合のこと。意志はともかく、「行けない」ことも十分あり得る、という返事なのだ。「行けない可能性」はさりげなく、しかし、しっかりと表現されている。

ている。あくまで、表面上の文末は「行く」。「行きたい」気持ちもそれなりに伝わる。ただ、やっぱりその意味は曖昧である。

では、その意味はどう解釈されるのか。大学生五人(うち女性四人)に、「明後日の、徒歩一〇分ほどの場所での、自分が企画に少し関わっている午後六時からの無料のコンサートに誘った」として、「親しい友達」の返事による「行く」期待度(%)を聞いてみた。

まず、「行く」という返事なら平均で九〇%の期待度(中央値九五%)。「行くと思う」なら七一%(同八〇%)。一方、「行けたら行く」の期待度はなんと三二%(同三〇%)だった。「行けたら行く」という返事は曖昧ながら、実は可能性がかなり低いと解釈されているようだ。

ついでに、「行くと思うけどわからない」「わからないけど行くと思う」という順序の違う表現での解釈についても調べてみた。前者は四五%(中央値五〇%)、後者は六三%(同七〇%)の期待度だった。内容は同じでも結構差がある。最初の「わからないけど」はいわば注釈的に解釈されるのに対し、あとの「わからない」はおそらく結論的に解釈され、期待度が下がるのだろう。表現の順序は意外に大切だ。

よく日本語は曖昧だと言われる。確かにそうだが、全く曖昧というわけでもない。表現によって、それなりの「解釈のされよう」というものがある。ま、わかるときはわかるといのが日本語のおもしろいところ——そう考えられるのなら、そう考えておこう。

早稲田大学教授

森山卓郎